

「HSK 季刊わたぼうし」 第58号

発行者:わたぼうし連絡会

発行日:2002年(平成14年) 7月3日 '02夏号

第58号の特集

テーマ・夢を実現したい

谷口明弘さんの講演を聴いて

～障害者自立生活問題研究所所長～

サッカーだ 野球だ相撲だ チャンネル権

比呂雪

この機関紙は障害のある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

テーマ・谷口明広さんの講演を聞いて

今回は昨年12月9日に「青山彩光苑」、今年2月24日に「コスモアイル羽咋」で行われた自立生活問題研究所所長・谷口明広さんの講演を聴かれた方々の感想を特集してみました。

障害者週間の講演会に谷口明広氏を招いて

鹿島町・北口 登志子
(青山彩光苑生活指導員)

谷口さんのお話は以前2度ほど聞いたことがありました。その時から、障書を持って生きる人間の立場と障害者を支援していく両方の立場で語られる谷口さんに非常に惹かれました。

今回、青山彩光苑でお話しして下さるときに、どんなことを話せばよいのかんな人々が入所しておられるのか、どのような問題が起きているのか、何を求めておられるのかなど…さまざまな情報を引き出し、講演の内容を決められたようです。

現在150名の利用者が青山彩光苑で生活しておられます。その中で本当の意味で充実した生活を送っておられるのはどのくらいなのか私には見当つきません。それは職員でも同じことが言えます。本当の意味の充実とは、仮に悲惨な状態であろうとその当事者である本人が納得いく幸せな日々を送っているかもしれない。また、幸せそうな人も実は苦しんでいるかもしれない。結局本人にしか幸せかどうか充実しているかどうかはわからないという前提があるからです。

障害を持つのが持っまいが、幸せに生きることはできる。それが谷口さんのメッセージだと解釈しました。そしてそのためのポイントとして、「夢をもって生きること」を語っていかれたと思います。具体的な例として、ジェットコースターのお話をされました。普通の人ならジェットコースターに乗ることはそんなに大変なことではありません。ですから夢の一つになる可能性はそんなに鳥くありません。だけど障害を持った谷口さんにすればとても大きな夢の一つだったとのことでした。

そして実現した時の感動を冗談交じりに話されたとき、障害をもたない人々は何を感じ、障害をもった人々は何を感じたのでしょうか。共通して言えるのは、障害を持つのが持っまいが、夢をもって生きることは非常に楽しくて、生き生きしてくる。苦しい時期があっても乗り越えた時の大きな喜びは、たとえようのないものだということ。どんなにお金を積んでも買うことができない極上の喜びであるという事と感じました。だから「夢」をもつことは大切なのだと話されたように思います。

谷口さんは、いつもどうしたら障害を持った人が幸せに生きることができるかという事を考えておられるようです。そして本当の意味の幸せとは、三度の食事がきちんと食べることができ、暮らす部屋があり、介護が受けられる生活がととのっていることが本当の意味の幸せかと投げかけられていたと思います。自分らしく自分が納得いく人生を送ってこそ本当の意味の幸せではないかと言っていたように思うのですが…

今回、私は障害者週間の担当をさせていただき、私の人生においてとてもステキなプレ

ゼントをもらったような気がします。仕事で得た経験が私の人生に光をもたらしてくれた。お給料をもらって私の人生にプレゼントをもらえた「なんちゅうおいしい話や」とおもいます。

講演を聴きながら私はいつのまにか、利用者のためという視点で話を聞いていない自分に気がつきました。実は私自身のために聞いていたようです。

ステキな機会を与えてくださった皆さんに感謝します。有り難うございました。

谷口さんの講演のテープを聴いて

七尾市・永井 仁志
(七尾聖書教会牧師)

講演の後、ボランティアをしておられる方の質問の答えが心に残りました。こんな内容でした。ボランティア精神は「障害者への援助ではなく、共に歩むものである」ということでした。ということは、ボランティアの方の生き方も重要であり、ボランティアをする人は健常者が多いと思いますが、その人の生き方こそが共に歩む障害者に、影響を与えることが多いのではと痛感しました。

谷口さんは当初は障害を憎んでいましたが、やがて障害と仲良く生きていく姿勢に変わってから、生き方が前向きに変えられたようなことを語っておられました。まさに障害者だから援助してもらって幸いを得るというのではなく、障害の中にこれを与えられたものとして受け止めていく積極的な姿勢こそ、人生に新しさを生み出していく、障害と共に歩む恵みを見たような気がしました。

私の周りにいる何人かの障害者の方々は、それに支配されることなくむしろ受け入れて、逆に私たちが気付いていない当たり前のことに感謝している人がおられます。もし障害にだけとらわれていたならば、気付かなかったと思いますが、今はそれを賜物として受けとめておられるようです。

谷口さんが自立が夢ではないと語っておられましたが、そのためにこそ障害を受け入れ、自分に与えられた人生を大いに楽しもうとする夢を持つ生き方には教えられました。体の障害はなくても、人生のマイナスと思われるできごとを、障害物として、それにとらわれてしまいがちな私たちも、実はそのことの中に、見方を変えれば新しさがあることを知らされたような気がします。

ご両親が、障害者は安心して食べて寝ていることができればそれで幸せという、間違った観念を持っていたと言っておられましたが、確かに誤解だと思います。むしろ私たちの方が大切な夢を生きがいを、目先のことにとらわれて失っているのかもしれない。

谷口さんの講演を聴いて

金沢市・沢田 穰
(障害者施設職員)

谷口さんとは、実に20年ぶりぐらいの再会(といっても直接、言葉を交わせなかったのですが)でした。20午前といえば、僕は南陽園という施設の職員、谷口さんが大学生でした。実家に帰郷されていた谷口さんが何かの用事で南陽園に来られた時に親しくなり、以来、賀状の交換をさせてもらってきました。

谷口さんの活躍はマスコミ等で知っていましたので、講演がとても楽しみでした。講演の中味はとても刺激的、時に過激とも思える言葉をユーモアのある関西弁でさらっと口走る、なんとも小気味いい愉快なものでした。時間があっという間にたってしまったという印象でした。

緑あってまた施設の職員をさせてもらっている僕にとって、施設は当事者の方が地域に住んで、疲れたらたまに休息に来る場で良いんじゃないか、という言葉が一番心に残っています。

谷口さんの講演のために奮闘された方々改めて感謝いたします。

谷口明広氏が語る 「楽しく具体的な自立のための知識」

北陸先端科学技術大学院大学
学生・秋本 信子

わが国の障害者基本法の第一条に、目的として、「…障害者の自立と社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動への参加を促進することを目的とする」と謳って(うたって)います。障害のある人の自立や、あらゆる分野の活動への参加は、当然の権利として保障されているのです。

それにもかかわらず、今でも、障害のある人で自立し、社会活動に参加して人生を謳歌(おうか)している方は限られているのではないのでしょうか。だからこそ、そのように自立している障害のある人の体験談は、多くの自立のための知恵を含み、誰もがそれぞれの立場で自立するためのヒントになり得ると思うのです。

青山彩光苑にて

昨年の12月9日(日)、青山彩光苑で開催された「2001年障害者の日・障害者週間」に参加し、幸運にも京都府自立生活問題研究所所長の谷口明広氏の講演を直接聞いてきました。

講演のテーマは、「ともに生きる社会をめざして一夢を持ち、夢を叶えて生きるには…」と題されていました。事前に『HSK季刊わたぼうし』の編集責任者の方からNo.56号をいただき、プロフィールを読み、夢を叶えて生きてきた生き方にひきつけられました。

氏が、自ら自立生活を実践するきっかけは、日々の生活のなかで、ふと感じた「思い」であったという。26歳まで、「オ！」だけで、尿瓶や好きな料理をお母さんが並べる生活のなかで、ふと、「このまま一生、“オ！”つて言うだけやろか」と思ったとたんに、「私もっとしゃべりたいな。“オ！”だけじゃ、つまらない人生、いやだ」と思ったといひます。

次に氏が考え、実行したことは、障害者米国留学研修制度に応募したことだった。「この魔の手から逃れないと、私は一生、“オ！”だけで終わるな。もうこうなったら、海外逃亡するしかないな」と思って、「思いを込めて応募した」という。

このことから、誰でも、日々の生活のなかで、ふと感じた思いや不平・不満を持ったとき、では、どうしよう。自分はどうしたいのか」と考え、具体的な夢あるいは目標とし、そのための情報を集め、自分自身で工夫し、次に勇気をもって実行することが、『夢を叶えて生きるための知識』なのだと考えられます。

さらに、「ともに生きる」には2つの意味があると語っていました。「1つは、障害を持っている方と持たない方がともに生きる。もう1つは、私は障害を持っている方が、障害とともに生きてもらいたいと思う」ということでした。

平成7年に、「障害者プランナーノーマライゼーション7ヵ年戦略」が具体的に計画され、「①地域で生活するために。②社会的自立を促進するために。③バリアフリー化を促進するために。④生活の質（QOL）の向上」を目指して。⑤安全な暮らしを確保するために。⑥心のバリアを取り除くために」などの推進を図るとしている。具体的に計画された割に、未だ、わが国の社会に浸透しているとはいひがたい。氏の考え方は受身ではなく、障害のある人・ない人の双方からの歩み寄りが、ともに生きる社会の実現に必須であることを示唆しています。

「自立生活は楽しく具体的に一障害をもつ人たちの個人別プログラム計画」から

氏は講演で、「私を特別だと思わないでください」と繰り返し言っていた。それは、困難な状況に遭うたびに、常に自分の頭で考え、工夫し、勇気をもって実行する体験を通して、「自立生活はどのような障害をもつ人であっても楽しくできる」という確かな確信と自信に裏打ちされているからだろうと思われまひ。

個人別プログラムとは、「夢を語ることからはじまり」、「本人が決定し、本人が具体的に実行し、周りの人たちは本人の目標達成のために具体的な援助をするプログラム」であるとしています。

まず、“本人の将来の夢”の話から、1年後ぐらいには「実現可能な目標」それも「楽しい目標」をたて、機能面・コミュニケーション面など10の側面から、3ヵ月後・6ヵ月後・9ヵ月後・1年後の具体的な計画を書き込んでいくことから始まひ。

この本には、「夢を実現させる知識」が多く盛り込まれています。「“夢”を削りながら成長していく」と、「夢が叶うことなど考えなくなり、ひいては夢自体を持たなくなるのです」ということは、障害を持つ人だけでなく、現代のわが国において社会現象化しているとはいひえないでしょうか。

「夢を実現させるための9ヵ条」とは、「①自分のことは自分でしろ。②好きなことを勉強しろ。③どんなことでもよいから得意技をもて。④できるだけ上手に他人を使え。⑤自分自身を大好きになれ。⑥とてつもない大きな夢をもて。⑦ひたすら願え。⑧しつこく、しがみつけ。⑨感謝しろ。感謝するという気持ちが夢を現実に近づけていく。」としてい

ます。これは、「計画を実行し継続するうえでの知識」といえるでしょう。

「“自分は何もできない障害者だ”と長年にわたって思い込んできた人たちの気持ちを変えていくことは、支えていく立場の人たちにも忍耐を要求するかも知れません。しかしながら、“夢は叶うものだ”という経験を一度でも持った人たちは、それまでには考えられなか、たぐらいの“能力”が開花するという事実を目の当たりにしています」という確信に基づく氏の体験的知識は、講演という「知識の伝達の場」を通して、障害のある人だけでなく、誰もが影響を受けうると思いました。

まとめ

障害のある方々の福祉サービスは、「措置から選択の時代へ」とうねりを変え、「自分の人生を自分で決定する」という「自己決定」声強要され、選択した本人への責任転換がなされようとしています。「障害とともに生き、自分の人生を自分で決定する生き方」のノウハウは、医療・介護の専門家も持ちあわせてはいません。なぜならば、自ら体験してはいないからです。

だからこそ、「障害とともに生きる、楽しく充実した人生」を体現している方の、体験から得た知識を学ぶことは、当事者だけでなく、医療・介護にたずさわる従事者や家族にとっても意義深いと考えます。

さらにいえば、当事者と医療・介護の従事者や家族・ボランティアの関係は、一方通行ではなく、相互扶助「相互に援助しあう」という観点にたつことが求められていると思われれます。

一参考文献一

- ・谷口明広・武田康晴：『自立生活は楽しく具体的に一障害をもつ人たちの個人別プログラム計画』、かもがわ出版、2000
- ・久保絃章著；「自立のための援助論ーセルフヘルプ・グループに学ぶ」、川島書店、2000
- ・全国自立生活センター協議会：「自立生活連動と障害文化ー当事者からの福祉論」、200

ふれあいフォーラム21

オラとあんたのまちづくり・共働作戦

—ふつうにくらせるしあわせ—

“ふれあいフォーラム21”を開催して

ふれあいフォーラム21

実行委員長・菊澤 幹子

『おらとあんたのまちづくり・共働作戦！』

～ふつうにくらせるしあわせ～をテーマに、2月24日(日)、コスモアイル羽咋を会場にして開催されました。

「福祉の世話にだけはなりたくない…」

「福祉は、自分とは別の世界の人たちのこと」

という認識がまだまだ多いという現実があります。

“地域福祉とは、一人ひとりが個人として尊重され、住み慣れた地域で安心して暮らせることである。”そんな当たり前のごとを、普通のことを、自分のこととして考え、行動へと一歩踏み出していただきたいとの願いを込めてこのフォーラムが開催されました。

まず、最初に地域福祉の案内役である市社会福祉協議会(以下、社協)が推進している“ふれあいのまちづくり事業”の中間年(5年間の事業の3年目)であるということで、中間報告が行われました。

総合的に評価をし、高齢者、障害者支援、ボランティアの分野には一定の成果をみたものの、住民ニーズの把握、子育て支援の分野では、十分ではなかったという課題が報告されました。

次に、谷口明広氏(自立生活問題研究所所長)を講師としてお迎えし、『ともに生きる社会を目指して』～ふつうの生活ってなんですか?～と題しての講演をしていただきました。差別と区別の話などを織り交ぜ、当たり前に、ふつうに暮らすということ、障害という視点でわかりやすくお話しして下さり、笑いあり、涙ありの楽しい1時間半となりました。

最後に、ふれあいフォーラムに移り、住民のそれぞれの代表から活動発表や意見発表をいただきました。

★民生児童委員からは、民生委員は何をする人なのか、どんな課題があるのかを…。

★移送ボランティアの方からは、外出支援の要望がどんどん多くなっている。制度上の縛りをなくし、もっと自由に外出できるようにと…

★若者の代表からは、「今の若者は、無感動、無関心と言われるが、決して関心がないわけではない。チャンスがあれば参加したいと思っている」と…

★子育て中の母親の代表から、「子供を連れて遊びに行く、屋内の遊び場がない。もっと子育て支援の場が欲しい」と…。

それらの発言を受け、市社協会長、市健康福祉課長、ボランティア代表で、“今後の羽咋の地域”についてパネルディスカッションが行われました。

時間が短く、少し盛り上がり欠ける面はあったものの、「公私協働とは名ばかりで、本当に行政は社協を育てようとしてるのか」「住民も地域を良くしようと思ったら、見ざる聞かざる言わざるではなく、見てやろう！聞いてやろう！言ってやろう！の精神で行動しましょう。」との刺激的な発言もありました。

これを受け、千葉茂明氏（北陸学院短期大学教授）にまとめをいただきました。「社協は、住民代表の組織として地域福祉を推進する役。住民がどんどん期待を寄せて欲しい。そして、会費で支えて欲しい。みんな支えない限り行政に頼らざるを得ないのも社協である。市民活動をどうまとめていくのか、住民にとって素晴らしい福祉社会を築き上げていくのか、社協の今後に期待する。」とまとめていただきました。

～羽咋わたぼうし会へのインタビュー～

当日は、午前中に、ボランティア連絡協議会（19グループ、790名、7個人）の設立総会もあり、他にも行事が重なる等で、参加者が少:かったという反省を残しながらの閉会となりました。

実行委員会は、当日まで14名のメンバーと市社協職員で、7回の会議と打ち合わせ等を行い住民参加のもと運営。これからの羽咋に乞うご期待を!!

“ふれあいフォーラム21”

オラとあんたのまちづくり・共働作戦

羽咋市・東山 春充

2002年2月25日（日）午前11時からコスモアイル羽咋内にある円形の多目的スペース、ロトンダ（小ホール・以下、省略）へ入るとテーブルが並んでいて、その上には各ボランティア団体名を書いたものと弁当と紙パックに入っているお茶が置いてあるので「車いす友の会」の指定席に着きました。

羽咋市内には19グループと個人では7人のボランティアが加盟していて、総勢790人も会員になるそうです。その内の各グループの代表者と個人ボランティア7人を初め、羽咋市助役（市長が公務のため欠席）・羽咋市社会福祉協議会会長・羽咋市ボランティアセンター運営委員長・羽咋市健康福祉課課長・羽咋市生涯学習課課長・羽咋市社会福祉協議会事務局長といった面々で羽咋市ボランティア連絡協議会を設立発足総会をスタートです。

総合司会者から羽咋市ボランティア連絡協議会役員の会長・副会長・理事・書記・会計の役員体制の承認があり、それぞれの役員の紹介がありました。次に規約、事業計画、予算審議といった内容の説明がありました。

平成7年7月7日に羽咋市ボランティアセンターを開所し、平成13年2月24日に羽咋市ボランティア連絡協議会が新しく発足（誕生）したわけです。略称は「ボランティア連協」と称します。

この会の目的とは…

この会は、ボランティア活動を通じて結ばれ、互いに助け合い輪を広げ、地域に役立つことを目的とする。

（活動）

- （1）会員の交流・親睦
- （2）会員の連絡調整
- （3）会員の育成推進
- （4）活動に関する広報
- （5）その他、目的達成に必要な事項

このようにボランティア連協の詳細な説明と報告がありました。ボランティア連絡協議会設立準備委員長が連協の発足式だということで挨拶中に歌を歌おうということになって…。(Happy Birthday 連協♪)を皆で歌ったんですよ。一応、ボランティア連協の誕生日ですもんね。

そうこうしている間に、講演者の谷口明広氏が到着されたとのことで付き添いの若い男性が谷口氏の車いすを押して拍手でロトンダ内へ招かれました。普通は控え室なりを用意するんだろうけど皆と一緒にボランティア連絡協議会設立発足総会の場に居たんですよ。

19の加盟グループの活動紹介があって、某グループはミッキーマウスとミニーマウスの姿をした人が交じってPRをしてミッキーマウスとミニーマウスが来賓の役人席へ行き握手をすると役人の皆さんも嬉しそうにしていました。

また、某グループが赤いハワイのムームーという衣装を着て踊りながらのPRでした。年齢は別として首には…頭に花の輪を乗せて首にはレイという風に本格的でした。

羽咋市社会福祉協議会の女性職員も赤いムームー姿で飛び入り参加をしていて首からのレイを谷口明広氏の首に掛けてあげると、ニッコリと笑い嬉しそうでした。

最後に、谷口明広氏が連協のお祝いの一言を…「え～ここは羽咋なのかハワイなのか分からなくなってしまいました」そう言うと、皆から笑いをもらっていました。

羽咋市の福祉は10年ぐらい遅れている。そういう内容だったので重みのある言葉でした。役人の皆さんを初め、谷口明広氏とが同じ口トンド内で連協の役員と会員全員で昼食を食べたんですよ。なかなか開かれてるでしょ!!? こういう風に皆で同じ釜の飯を食べないと輪が結束したものにならないと思うんです。そういう意味で、この企画は大成功だったんじゃないでしょうか。

講演は午後1時16分にコスモアイル羽咋内にあるユーフオニーホール（大ホール・以下、省略）で始まりしました。演題『ともに生きる社会をめざして』－ふつうの生活ってなんですか－

●講師：自立生活問題研究所所長・谷口明広氏。1時間30分の講演の間、楽しい話を交える話術で明日の福祉というものを考えさせられる素晴らしい講演でした。最初、講演活動など300日以上をこなすということなので「一回、幾らになるんだろう？」という風に貧乏性の一人として思わず勘定をしてしまいました。

2001年12月9日、青山彩光苑にある「障害者の日」に行ったときも谷口明広氏の講演を聞いたけど、話の内容が同じでないのが流石だと思いました。

講演内容を下手に説明をするよりも実際に講演を聞いてみると素晴らしさがお分かりいただけると思います。前向きな考えで障害を笑いに変えられるパワーというものを自分も見習わないといけないと思いました。

羽咋市広報I氏と同じ意見だけど、「がまんしないで」のフレーズがよかったです。個人的には、かなりお気に入りです。

サングラスと手袋をした女性4人がOHP（オーバーヘッドプロジェクター）の四隅を囲んで時間ごとに交替をして話したとおりの言葉をOHPフィルムにマーキングペンで書く要約筆記（石川県聴覚障害者情報文化センター）と手話通訳士（石川県聴覚障害者情報文化センター）がダブルで講演の様子を通訳していました。本来は聴覚障害者の通訳となるわけだけど、耳の聞こえる僕には4人の女性が話した言葉の要点を交替でスラスラ文字にする要約筆記の活躍が目でも楽しめたし、講演者の話と同時に読めるので耳が聞こえても便利に感じました。

講演後は第2部の『ふれあいフォーラム21』オラとあんたのまちづくり・共働作戦！というパネルディスカッションでした。パネラーは、ステージを客席から見て右側に雌、流れるような司会と進行をする北陸学院短期大学人間福祉学科長である千葉茂明氏。左席には羽咋市健康福祉課課長・羽咋市社会福祉協議会会長（民間）・ボランティアの代表者（金沢の福祉施設に勤務されている男性）の3人。そして、ステージ上の真ん中にある演台があり、民生委員ってどんなことをしているのかを羽咋市民生児童委員協議会会長がお話をしていました。

羽咋市シルバー人材センターから派遣された友抱号2の運転手からの運転移送サービスについての問題点などの現場の声。次に、来年度から開始される学校5日制を踏まえて子育ての立場から見た羽咋市の施設の疑問点などを羽咋市在住の主婦の声。羽咋市に対する意見を新成人を代表した青年の声。

この3人の意見発表を元に明日からの住み良い羽咋市というものを会場内の皆と議論したんです。会場内からも笑いやかけ声（役人に対しての不満を言うと拍手喝采や、発表者にガンバレや！などの応援）などが出て堅苦しくない座談会形式だったので助かりました。

その間、会場内に集まっている市民からの質問や意見を述べる時間もあり、その述べる人に田鶴浜高校の生徒達がマイクをあちこちへ持って駆け回っていました。これを目にした千葉茂明氏が田鶴浜高校の生徒達の姿こそ明日からの明るい羽咋市を作り上げていくと思うので皆さん！大きな拍手を彼女たちにしてあげてください。そうすると、大ホール内は拍手で響き渡ったのが僕も嬉しく思いました。

最後を締めくくってもらうのに、左席には羽咋市健康福祉課課長・羽咋市社会福祉協議会会長・ボランティアの代表者の3人から一言がありました。ボランティアの代表者は「見ざる・聞かざる・言わざる」をもじって「見てやろう、聞いてやろう、言ってやろう」そう述べたのが印象的でした。また、羽咋市社会福祉協議会会長は「役人は時間と暇がなくてできないと言うが、ただ、やらないだけのことであって役人には時間がいくらでもあるんです。忙しいというのは言い訳であって時間と暇は作るもの。

それと第1には、細かいことには関わりたくないのと面倒くさいだけなんです。そして、行事というものは殆どが休日に開催されるものです。これに役人が出席したところを私は一度も見ることがない。

こんなじゃ、羽咋市の福祉どーのこーのって言う前に住み良い羽咋市があり得ないことだと思う。こういう点を役人自ら襟を正して考えなくちゃいかんのかな。」とも、この意見に対して、もちろん、大拍手でした。

次に、羽咋市健康福祉課課長から顔を赤くしての言葉でした。「友抱号のもともとの導入目的は、買い物やコンサートへ行きたいなどの要望を満たすための足でした。しかし、今では通院目的に使用されているのが実態です。年々、高齢化の波が押し寄せて来ることを考えると運転手の負担と利用者の不便さを真剣に考えないといけない。議会を通らないといけないが、結論から申しますと勇気を出してもう一台の友抱号を導入します。」友抱号2の利用者の一人として、とても印象深い羽咋市健康福祉課課長の言葉でした。

新成人を代表して述べた青年が言っていました、「若者は羽咋市に対して無関心なのではなくて、声を掛けないので皆にも声が届くわけがない。もっと周りからの声が届くようにしてもらえると若者だって立ち上がるんです。」その声がとても頼もしく聞こえたので印象に残りました。

パネラーの千葉茂明氏いわく、「話が煮詰まったことで、これから！」というところで終わるのが“フォーラム”というもんなんだそうです。なんだか妙に納得をしてしまうパネルディスカッションの締め言葉でした。こうして午後4時に「ふれあいフォーラム21」オラとあんたのまちづくり・共働作戦は無事に終えたのでした。

2002年夏の講演会・講座の案内

脳性麻痺・ポリオの人たちの二次障害について

日 時:2002年7月28日(日)午後1時30分～4時まで

場 所:サンシップとやま501号室(富山市安住町5番21号)

076-432-6141

講 師:野村 忠雄氏(富山県高志リハビリテーション病院 副院長)

「この痛み、しびれは二次障害!？」

これまで脳性麻痺者は、「症状は、固定的・永続的であり、これ以上悪化しない」と言われてきました。しかし、私たちの周りでは、以前できていた身の回りのことが徐々にできなくなっていったり、身体の状態が年々悪化の一途をたどっている、そのような人々が多くいることが分かっています。

ピア・カウンセリング集中講座

日 程:2002年8月29・30・31日(木・金・土)

場 所:サンシップとやま501号室(富山市安住町5番21号)

076-432-6141

リーダー:野上温子・湯山恭子

両方ともお問い合わせ・主催:特定非営利活動法人・自立生活支援センター富山

〒930-0024富山市新川原町5番9

レジデンス新川原1F

電話・FAX番号:076-444-3753

私のホームページ

このコーナーは福祉関係の情報を発信している方々のホームページを紹介します。あなたのホームページの紹介を600～800字程度にまとめ、petero@po3.nsknet.or.jpまでお送り下さい。

みんな一緒にビスタリ行こう！見田進一

<http://w2222.nsk.ne.jp/~mita/>

金沢市・見田 進一

タイトルの「ビスタリ」とはチベット語で「ゆっくり」という意味です。高度順応するためにゆっくり行動しなければならないチベットの人々と新しい人生に高度順応していく障害者の僕とは時間の流れがどことなく似ています。体育会系貧乏性。仕事・趣味・家族サービスにエブリデイBUSYしていた見田進一が21世紀に迎えた新しい人生は…ビスタリ、ビスタリ。2001年2月17日にスキーで転倒。「第五頸髄損傷」し現在は入院治療中（02年4月6日に退院予定）そんな私の入院日記をホームページ“ひとりごと”にて紹介しています。そもそもホームページとはインターネットを活用した本人そのものだと考えています。3次元の世界に限られていた自己アピールの環境が今、インターネットという新たな環境の登場により、自分自身をリアルタイムに自由にインターナショナルにアピールできるようになりました。僕のホームページのコンセプト（考え方、概念）は“もっともっとコミュニケーション”です。入院中でも、指が動かなくて電話ができなくても“ネットなフレンド”がいつでも集まり励ましてくれます。僕が入院中にもかかわらず高いテンションでいられたのも“ネットなコミュニケーション”がとれてたからこそです。

これからもうれしくて、悲しくて、ゆっくり、ちよつとだけ、会いたくて、でもすぐに会いに行けなくとも、すぐ会えます。そんな遠くて近いホームページになるといいなー。

「HSK季刊わたぼうし」がホームページで見られます。

<http://www3.nsknet.or.jp/~petero/>

ホームページ「ぜんちゃんの部屋」に「HSK季刊わたぼうし」が公開されています。今まで「HSK季刊わたぼうし」で紹介しましたホームページが、すべてリンクされています。

文字が小さくて読みにくい方、視覚障害者の方でも、文字を大きくしたり、音声読み上げソフトなどを使って読むことができます。一度、のぞいてね。

地域のバリアフリー情報

JR加賀温泉駅にエレベーターが設置されました！！

昨年11月14日にJR加賀温泉駅に南陽園の利用者の方が待ちに待ったエレベーターが設置されました。今までは駅員さんに介助を受け、車いすも持ってもらってホームまで移動していました。これからは最小限の介助でホームまで移動でき、依頼する方もずいぶん依頼しやすくなりました。

今回は利用者の方の体験を掲載させていただきました。(南陽園のホームページより転載)

- ①改札を通るとスロープが敷設されています。ただ、車いすが1台分しか通れません。
- ②行き来する車いすについては、待機場所があります。譲り合って行きましょう。
- ③スロープが終わると右手にエレベーターがあります。1つのホームに1台のエレベーターが設置されています。
- ④ドアの開閉は車いす上からは難しいので駅員さんをお願いしてね。
- ⑤エレベーター内は電動車いす1台と、2～3人は乗ることができます。
- ⑥中のボタンはホームの上↑かホームの下↓とドアが閉まるか開くかの4種類。他に非常用があります。
- ⑦ホームに到着
- ⑧ホームから電車内へ乗り込むときは折りたたみスロープが必要。駅員さんをお願いしてね。
- ⑨スロープの手すりには文字だけでなく点字でも方向が示されています。
- ⑩駅のすぐ外には車いす用に設置された自動販売機が2台あります。
- ⑪駅のトイレも男女別に身障者用のトイレが設置されました。
- ⑫駅の中のスロープには手すりの点字だけじゃなく点字ブロックもつきました。

編集者より

昨年9月に南陽園の行事に参加するために加賀温泉駅を利用しました。そのときにエレ

ベーター設置の工事が行われておりました。

昨年の暮れに南陽園のホームページでエレベーターが完成したことを知り、転載許可をいただき、掲載しました。ご協力ありがとうございました。七尾、羽咋駅にも一日も早く設置されるように祈っております。(桶屋)

青山彩光苑 障害者生活支援センター あおやま

身体に障害のある方とその家族の方が住み慣れた地域でより安心した生活ができるようお手伝いいたします。

ご利用内容

生活相談 平成14年4月開設

～さまざまな相談を受け付けます。～

介護・趣味・外出・福祉サービスの利用

住宅リフォーム・ボランティア

施設利用・就労など・・・

お気軽にご相談ください。

生活支援

ご相談に応じた内容をより具体的に、どのように解決すれば良いのかを一緒に考えていきます。

在宅サービス利用のお手伝い

さまざまな在宅福祉サービスを利用するためのお手伝いをいたします。「どのようなサービスがあるのかわからない」といったことがあればお尋ねください。

専門機関紹介

さまざまな専門機関を紹介いたします。「どこに相談したらよいか」などお困りのとき、適切な専門機関をご紹介します。

ピアカウンセリング

同じ障害を持った方があなたの悩みをともに考えます。

※相談は無料です。お気軽にご相談ください。

問い合わせ先：〒926-0831 七尾市青山町ろ部22番

青山彩光苑・障害者生活支援センター

代表電話 0767-57-3309・FAX 0767-57-1531

直通電話 0767-57-3754

Eメール f-sodan@bule.hokuriku.ne.jp

原稿募集

私の楽しい外出

障害者の外出について考えましたら、ほとんどの障害者の方は外出されていないことに気づきました。2年前に「私の外出体験」というテーマで投稿をいただきましたが、今回は「私の楽しい外出」についてご意見をいただきたいと思います。

- ・散歩、買い物に行きたい
- ・友人に会いに行きたい
- ・旅行に行きたい
- ・コンサート、講演を聴きたい
- ・お金をおろしに行きたい
- ・デートをしたい など

あなたの外出のバリアは？

- ・家族、施設等の無理解のバリア
- ・送迎、公共交通機関のバリア
- ・コミュニケーションのバリア
- ・道路、建物、設備等のバリア
- ・その他

バリアをなくし楽しい外出

募集期間

2002年11月末まで

字数 800～1200字

問い合わせ先・提出先

〒926-0831 七尾市青山町ろ部22番

青山彩光苑利用者・桶屋善一

FAX 0767-57-1531

Eメール petero@po3.nsknet.or.jp

マイ・ブックスルーム 車いすでアジア

山之内 俊夫 著

発行所:小学館

定価:本体1,200円十税

1991年8月、海水浴場での飛び込み事故で、頰椎を損傷した山之内さん。その彼がネパール人の大学生ジュカライくんの介護を受けながら、約1年半にわたるインド・タイ・スリランカとへの旅行体験記です。

この本を読んでいて、介護を受けること遠慮していたら、自分が何もできないことを教えてくれる。自分の目標を達成するためには、わがままな障害者になることも必要なのかも知れない。

山之内さんが旅行をともにした介護者ジュカライくんとの間関係、介護を受ける側と行う側の人間模様を描いた1冊です。

編集後記

ワールドカップサッカーが始まり、テレビに釘付けになっておいでる方も多いと思います。前回のフランス大会では1勝もできませんでした。今回は歴史的な勝ち点ゲットと初勝利、決勝リーグ進出と私たちに大きな夢、希望を与えてくれましたね。

今回は、12月と2月に行われた谷口明広さんの講演会の感想を特集しました。いかがでしたか？ 彼の積極的な生き方に、学ぶことが多いと思います。

次号は来年4月より施行される「支援費制度」の講演会が6月にありましたので、その講演を載せたいと思っています。(Z.0)

川柳裏表紙

サッカーだ 野球だ相撲だ チャンネル権

日本、韓国共催のサッカーW杯が開幕した。2カ国共催は史上初めての事。トルシエ日本はどこまで進出できるのか？ 一方日本のプロ野球もセ・パ両リーグとも熱い戦いをくりひろげている。星野阪神、原巨人の首位争い、大リーガーでは日本のイチロー選手が大活躍している。そして2場所連続優勝の武蔵丸で終わった大相撲5月場所等。TVのスポーツ中継が茶の間をわかせる。おのずとチャンネル争いとなる。“一家に一台”からこの頃は “一人一台”のテレビ時代になって「チャンネル権」など死語となってきた。(比)